

農業新聞「野良ばなし」【万国共通？「朝焼けは雨」】 14.9.19

明日は彼岸の入り。一般的に、9月23日の秋分の日には昼間と夜間の時間が、同じになるといわれているが、東京では昼間の方が16分長い。昼夜ともほぼ12時間になるのは9月26日～27日である。

国立天文台の日の出・日没の定義によると、日の出、日没とも太陽の上辺が水平線（または地平線）と一致した瞬間である。昼間が長いには2つの理由がある。昼間の方が、太陽の直径分だけ太陽の移動する道のりが長いこと。水平線の近くでは、大気の中を通る光の屈折によって、太陽が浮き上がって見えること、である。

天気のことわざ「朝焼けは雨」がある。朝方、東の空に薄い雲が散在しているとき、この雲に太陽光線が当たると、空全体があかね色に染まる朝焼けの現象が起こる。

この朝焼時の薄雲は、低気圧や温暖前線の進行方向600～800km前方付近に現れる巻雲や巻積雲である。低い雲がある時や快晴の時よりも鮮やかな赤の色彩を見せてくれる。

日本など中緯度地域にある各国の天気変化は、真夏以外の季節には、上空の偏西風（ジェット気流）に流されて西から東へ移動している。このため、早朝に現れる薄雲は、西側から低気圧や前線が近づくとつれ、雨雲に変身し、天気が崩れてくる。

ことわざ「朝焼けは雨」は、ドイツでは「朝焼けは雨と泥ぬかるみをもたらす」と言われており、外国でも立派に通用する。

これから秋にかけて農作物の収穫の時期になる。朝焼け、とくに紫色が混じっている場合は雨が降る確率が高く、農作業を早めに終わるようにしよう。

（ 気象情報システム部 高津敏 ）